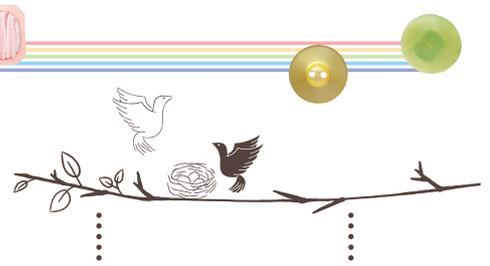


# 子供たちを守るために、 知ってほしいのキホン



子供を被ばくから  
守るためのサイト

Moms to Save Children from Radiation (MSCR)

<http://mscr.jp/>

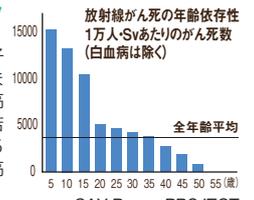
事態収束の進展が見られない原発事故。東電・政府に対する不信感が高まる中、子どもたちを守るのはパパママ、あなただけです！ まだよく分かっていない、安全でしょ？と思っている人に向けて、放射能に関するキホンをおさらいしましょう。

## 1 放射線は人の細胞を傷つけます 細胞修復できないと、がん化も…

放射線は体を通ります。レントゲンを撮ると体が透けて見えるのはそのためです。しかし放射線は、体を通るとき細胞の核に傷つけることがあります。傷ついた細胞は死んだり、修復されたりするのですが、傷ついたまま細胞分裂すると、「がん化」してしまうことがあります。多くの放射線を浴びれば、細胞が修復できない確率も高まるのです。つまり、がんのリスクを避けるには、できるだけ放射線を浴びないようにすることが大切なのです。

## 6 子どもは30歳の5倍にも！ 年齢に比例するリスク

がんリスクは年齢に比例するという子どもにとっては恐ろしい事実があります。30歳がほぼ平均値として、年齢が高くなるにしたがってリスクは減。逆に若くなるにつれて、リスクも増します。5歳の数字をみると、平均の4～5倍も高くなるのが分かります。



SAY-Peace PROJECT  
「放射線被ばくから子どもを守るために」リーフレットより

## 2 低線量の被ばくでも 将来的にリスクが高まります！

放射線が人体に与える影響は2つあります。1つは「急性被ばく」。500mSv以上といった非常に高い線量を浴びると、白血球の異常、脱毛・吐き気、細胞が破壊され死に至る…という、急性で生じる障害のことです。一方、「晩発性障害」は低線量の被ばくをすることで、数年後、数十年後に、がんや白血病を発病する可能性があるということ。「ただちに影響はない」けれど、子供たちの将来にかかわってくるのが「晩発性障害」なのです。

## 7 子どもの目線に立ってみたら… 汚染された土壌は切実な問題

地上からの高さや場所によっても、放射線量はバラバラ。大気中に放出された放射性物質は、雨とともに地上に落ち、土壌を汚染しています。校庭の除染によって空間線量が下がったという報道もありました。通学路沿いの雨どい、公園の茂み、落ち葉などでは、いまだに高濃度の値が計測されていることも事実。無邪気に遊ぶ子どもたちの目線に立ってみると、危険がいっぱいであることが想像できますね。

## 3 内部被ばくに気をつけて “食品基準値”にも要注意

体の外側から影響を受ける「外部被ばく」と、内側から影響を受ける「内部被ばく」があります。ここでカギになるのが「内部被ばく」。食べ物や呼吸、皮膚や傷口から取り込んだ放射性物質が体内に蓄積され、放射線を直接浴びるため、「外部被ばく」の5～10倍の影響があるといわれています。予防策としては、汚染された野菜や牛乳、魚は食べない、外出はできるだけ控える、マスクをするなど。食品の暫定基準値は、非常に高い値で設定されていることも忘れてはいけません。

## 8 原発から離れているから 大丈夫…とは限らない

放射性物質は、同心円状に広がっていくわけではありません。当日の風向き、天候、地形などによって、原発からだいぶ離れた場所でも高濃度であることが確認されています。実際に、千葉県柏市周辺、東京都葛飾・足立区周辺、埼玉県三郷などで高い線量が計測され、土壌汚染は福島のみならず関東全域にも広がっています。

## 4 独原発労働者と同じ年間限量を 日本の子どもたちに適用する政府

「年間被ばく線量」とは、人間が一年間に浴びても良いとされている放射線の限量です。平常時は、年間1mSv。ただし、この数値は「1mSvまでなら安全」というものではなく、日常生活を送る上で“どうしても避けられない放射線量”ということで決定された数値なのです。しかし福島第一原発事故を受け、政府は「年間被ばく線量は20mSvまで」と基準を引き上げました。この数値は、ドイツの原発労働者の年間被ばく線量と同じ。日本の労働基準法では、18歳以下は原発に立ち入ることさえできません。つまり、それほど人体に影響を及ぼす数値であるにもかかわらず、政府は20mSvという数値を子どもにまで適用しているのです。

## 9 “わずか”0.5%なら良いの？ その多くは子供が影響を受けます

大人の場合、年間20mSv浴びると「1万人に20人ががんで死亡する」と、国際放射線防護委員会(ICRP)は勧告しています。専門家の中には、「日本はこれまでも2人に1人がガンになっているので、わずか0.5%増えるだけだ」と考える人もいます。しかし、0.5%は本当に「わずか」と言える数字なのでしょうか？放射線に対する感受性は、子どもの方が4～5倍高いのです。つまり、ガンで亡くなる0.5%の中には、多くの子どもが含まれる、ということをお忘れはいけません。

## 5 ここまで浴びて大丈夫、 という“しきい値”はない？

年間100mSvを下回る低線量被ばくについては、専門家の意見が分かれています。福島県の放射線リスクアドバイザー山下俊一氏も、つい先日まで「年間100mSvまでの被ばくなら大丈夫」と言っていました(現在は避難した方が良くと言っていますが…)。意見が分かれる原因のひとつは、仮に放射線の影響によってがんや白血病になったとしても、その因果関係を立証することは困難だからです。しかし忘れてならないのは、「ここまでなら放射線を浴びても安全」という“しきい値”はない、というのが主な国際機関の合意事項(※)となっている、ということ。つまり、できるだけ放射線を浴びないことが、子どもをリスクから守る唯一の方法なのです。

## 10 絶対安全…はないから 少しでもリスクを下げて！

以上のように、放射能についてのキホンを学べば学ぶほど、子どもの危険性や、“絶対に安全”という値はないリスクがよく分かります。このことを頭に入れ、最終的に判断するのは人それぞれ。少しでも子どもたちのためにリスクを避けてあげることが親としての役割です。避難する、母親たちのネットワークで声をあげる、日常生活で気をつける…。1人1人がやれることから始めてみませんか？

※これらの国際機関が、放射線による発がんリスクにおいて「しきい値なし」という考え方を採用しています。【国際放射線防護委員会(ICRP)】【米国科学アカデミー(BEIR VII)】【国連化学委員会(UNSCEAR)】【欧州放射線リスク委員会(ECRR)】

